

## 何をして欲しいの

荻上直子監督の映画「トイレット」を観ました。俳優はおばーちゃん役だけ日本人で、他はアメリカ人です。ほのぼのとした家族の絆が、心に優しい潤いを与えてくれました。舞台は北米の地方都市でしょう。一人の母親が亡くなりました。遺された家族は4人。上の息子モーリーは優れたピアニストですが、コンクールの本番でパニック障害の発作が出て失格し、以来閉じこもりになってしまいました。弟のレイは毎日顕微鏡をのぞいている検査技師で、プラモデルにこっています。年下の娘リサはエアギターに夢中の大学生です。そして日本から来てまだ間もないおばーちゃんは、食卓についても一言もしゃべらず、ほとんどの時間、部屋でひっそり暮しています。

4人がそれぞれ勝手な生き方をしているのですが、それでいて矢張り一つの家族なのです。それはお互いに対してちょっとした心遣いをし合っているからでしょう。モーリーはパニックになると時間かまわずSOSの電話をレイにかかけます。レイは仕事場からでもすぐ駆けつけます。レイは気楽なアパート暮らしをしていましたが、火事にあい家に戻って来ました。モーリーは荷物を片付けて部屋を整えてやります。その時部屋の奥から、ほこりをかぶった母親愛用の足ふみミシンが出てきました。母が洋服を縫って着せてくれた幼い日々の思い出が甦ってきました。モーリーはミシンを自分の部屋に運んできれいに磨き上げ、端切れで縫ってみようとしたのですが、うまく動かさせません。口をきかないおばーちゃんを引っ張ってきて教えてもらいました。

母のように着る物をつくってみたい。モーリーはおばーちゃんに生地を買うお金を頂戴と必死に頼みました。じーっと聞いていたおばーちゃんは、黙ってお財布から200ドル取り出してくれました。家の中に4年間引きこもっていたモーリーが、大決心をして玄関から外に一步踏み出しました。生地を買って来て、夢中になって簡単なスカートを縫いました。そしてモーリーの部屋から家中に響き渡るピアノの音が甦ったのです。レイは出勤前におばーちゃんが長々とトイレを占領するので困りはてました。それにしてもトイレから出て来ると、おばーちゃんは必ず深いため息をつくのが気になります。同僚に相談しました。便器のせいではないか。日本の便器は和式だ。腰掛式が不具合なのではないか。それともウォシュレットという最新の便器が日本では開発されている。そこでレイは和式の絵をかいて「おばーちゃん、この便器の方がいいの？」と尋ねます。首を横に振りました。

「そうか、ウォシュレットに違いない」レイは何度もためらった末に、自分がどうしても買いたかった大きなプラモデルを断念して、ウォシュレットを日本に発注しました。

モーリーはコンクールに再挑戦しました。いよいよ本番です。モーニングのズボンの上に自分で縫ったスカートをはいた姿で会衆に挨拶してところで、また体が固まってしまいました。その時です。会衆席でおばーちゃんがすっと立ち上がり、「モーリー」と大きな声で呼びかけました。親指を差し出し「カーム！（落ち着きなさい）」。はっと我に返ったモーリーは、素晴らしい演奏をしたのでした。

その夜、リサがモーリーに相談しました。「私もエアギターの国際コンクールに出たい。優勝してみせる。おばーちゃんに旅費をおねだりしたいのだけど」「相談してごらん。でも一生懸命頼むのだよ」リサはおばーちゃんの前で身振り手振りでエアギターの演奏をして頼みました。じーっと聞いていたおばーちゃんは、財布から2000ドル出してくれました。

待望のウォシュレットが到着し、トイレに据付けられました。でも一足違いで、おばーちゃんは病院で亡くなってしまいました。そして淋しくなったトイレで、レイがおばーちゃんに代って、ウォシュレットを初体験します。その使い心地の良さに、思わず発する「ウゥー」の叫び声と水の音の余韻と共に、映画は終わりました。

「何をしてほしいのか」イエス・キリストも孤独な人、疎外されている人に近寄っては、幾度優しく声をかけてくださったことでしょう。その言葉・その心が人と人とを、暖かい絆で結んでいくのですね。